あのときの常呂・写真館

VOL 185

（２００５年）

平成１７年5月２１－２２日
ところ陶芸クラブ２５周年作陶展

▶『ところ陶芸クラブ２５周年記念誌』（平成１７年３月刊）によると、陶芸クラブが生まれるきっかけは、昭和５２年に福山小学校と吉野小学校で廃棄となった教材用陶芸窯を町民センターに持ち込み、陶芸室を構え、社会教育活動の一環として楽焼きを始めたこと。●翌年、電気窯や電動ロクロなどを整備し、このときに下沢土泡氏（札幌市：北陶社）と常呂町との出会いが生まれました。「ところ陶芸クラブ」の発足は昭和５４年で会員は１４～１５人。当時は社会教育との結びつきが強く、文化教室「陶芸コース」の実施を経て小規模な作品展示会を開催します。●昭和５５年から５７年までは社会教育事業の文化教室「陶芸コース」に初級・中級・上級コースのランク付けを行い、指導者の養成を図ります。●常呂町の開基１００年となった昭和５８年は、ところ陶芸クラブにとって記念すべき年でした。陶芸室が常呂中学校の旧かしわ寮に移り、窯など作陶に必要な機材を整備。「町民６０００人の手形」作りへの協力、全戸配布した開基１００年記念の「縄文花活け」作製、敬老会プレゼント用湯飲み茶碗作製、第１回ところ陶芸クラブ作陶展など活動の幅が一気に広がります。●昭和５９年１１月、手工芸の館が完成し、陶芸設備が充実するとともにところ陶芸クラブの活動拠点が生まれました。●昭和６０年には「全国豊かな海づくり大会」があり、天皇・皇后両陛下（当時は皇太子・同妃殿下）が来町し、多目的研修センターでところ陶芸クラブ会員の作陶とところ流氷焼き作品をご覧になるという大きなできごとがありました。●これ以降、ところ陶芸クラブは網走管内の陶芸愛好会を組織化した「オホーツク陶芸会」の発足に関わったり、会員が積極的にさまざまな展示会に出品したり、下沢土泡氏との協力でイベントを催したりと独自の活動を進めます。●２５周年作陶展に関して、平成１７年「広報ところ」６月号の「まちの話題」コーナーでは、「多くの秀作が並びました…ところ陶芸クラブが記念展」と題して、２５周年記念作陶展を中央公民館で開催し、１５０人を超える町内外からの陶芸ファンが訪れ、会員が制作したつぼや茶碗，皿など多くの流氷焼きが人びとを魅了した」と伝えています。また、作陶展開催を知らせる北海道新聞（５／２１）では、「流氷焼き」を解説。概要は、青い顔料を入れた粘土で作ったつぼなどの表面に、白い粘土で模様をつけるなどして、オホーツク海に浮かぶ流氷を表現しているのが特徴で、クラブの講師を務めた陶芸家の絹張海泡さんの考案と紹介しています。

＊次ページには、活動拠点となった手工芸の館と２５周年作陶展の写真を掲載

＊上２枚：昭和５９年１２月４日　手工芸の館オープン（正面・流氷焼き作品）

＊以下１４枚：２５周年作陶展（中央公民館）

ところ陶芸

ところ陶芸クラブ創立25周年記念作陶展